

「武智様」

大和ロータリークラブの皆様、こんにちは。ご紹介に預かりました作曲の武智由香と申します。私は、2003年にロータリー財団の奨学生として英国王立音楽院に留学いたしました。今から15年以上前ですので、遙か昔のこのように、けれども昨日のこのように思い出が蘇ります。

今日は、留学までの経緯と経験を簡単にお話させていただきます。私は、東京藝術大学の作曲科の大学院修了後、駆け出しの作曲家としてパリに身を置いておりましたが、2001年に横浜市文化振興財団が企画する21世紀の始まりを祝う演奏会のために、作品委嘱を頂きました。世界的な指揮者・大野和士さんの指揮と選出により、オーケストラ曲の委嘱を受け、自分のオーケストラの新作が初演されました。若い作曲家の私には、夢のような経験でした。

そのオーケストラ作品を、英国王立学院の学長がお聴きになりました。その頃、英国王立音楽院は博士過程を設立した当初で、学長から直々に「博士課程の学生として英国王立音楽院へ留学しないか？」と打診いただきました。イギリスは、ピアニストの内田光子さんやバレンボイムなど、世界一流の演奏家が住まい、世界中の最高の演奏家達による演奏会が日夜行われる都市ですが、作曲家としても大変刺激的な毎日を過ごさせていただきました。

当時のイギリスはポンドが非常に高く、英国の高額な学費だけでなく、生活費を両立させるのは大変困難でしたので、ロータリー財団から奨学金の援助を頂け、本当にありがたく感謝しております。

2003年秋から英国王立音楽院の博士課程に参りましたが、渡英の直前の夏は、ボストン交響楽団のタングルウッド音楽祭のフェロー作曲家に選ばれ、タングルウッド音楽祭の夢のような場で、ヨーヨーマ（チェロ）のような世界的音楽家達と共に、3ヶ月間、現地に身を置き日々音楽三昧で公演を行ったり、勉強いたしました。その後、王立音楽院に籍を置きながら、作曲家としての仕事も続け、2005年にパリの国立音楽音響研究所（IRCAM）の作曲家研究員に選出頂きました。ロンドンとパリをユーロスターで行き来しながら、コンピューターの力を借りた最先端の音楽と音響を勉強しました。

現代はAIが現れ、更に計り知れない高度な技術が進化しています。クラシック音楽の作曲でも、コンピュータの新技术であらたな音響が生まれており、これからの若い世代が今後どのような音楽を作り出すのか楽しみでもあります。

私達は日々、書類作成にワードを使いますが、作曲の場合も「シベリウス」という世界中で使われているソフトがあります。イギリスでは、小学校でもこの作曲ソフトウェアを学校教育で援用し、子供たちが誰でも簡単に作曲ができるような環境にしています。

ただ、様々な音楽や作曲があるなかで、クラシック音楽の「作曲」には音楽の基礎となる「ソルフェージュ」という音楽の特殊な訓練も必要であって、自らの頭の中に音楽を鳴り響かせる、というプロセスが必要となります。なので、ただソフトウェアで気軽に音楽が作れる、というのは「創造」ではないように私は思います。音楽の「作成」の楽しみを知って、体験の機会を与えることで、次に見つけるべき「創造」に気付くための導入、としては良い機会かも知れません。

今、世界で私たちが必要とされているのは、「創造力」＝人間にしかできない、手を使い、身体を使って何かを生み出すということではないでしょうか。

若い世代の方々にとり、インターナショナル＝グローバルな事が日常である今、海外に留学してたくさんのかを勉強して頂きたいです。自分が日本人であることを再確認し、日本人としての誇りが海外に出ると見えて来るものです。

10月のラグビーワールドカップでも、日本チームの素晴らしさと誇らしさを実感しましたが、若い方々がそれぞれの分野の目標を持って海外に留学し勉強する中で、世界の人達を知り、共に生きることを知ってもらいたい。世界レベルの人間として、日本の文化の素晴らしさや、日本人としての思いやり、やさしさ、言葉の美しさなど、日本人であることを再確認して帰って来て頂けるよう、これからも、財団のご支援をよろしくお願いいたします。

本日はありがとうございました。 \_